

# 1950年代、 世界を熱狂させた男がいた。



エルヴィス・トリビュート・アーティスト

## 桐生 大輔 さん

きりゅう だいすけ

【プロフィール】1983年秋田市生まれ。宇都宮大学工学部卒業。15歳でエルヴィス・プレスリーに憧れ、東京都内を中心にライブ活動を始め。2011年「ジャパニーズエルヴィスを探せ」で優勝。同年エルヴィスプレスリーコンテスト世界大会（アメリカ・メンフィス）に出場し、アジア人で初めて世界トップ15入り。17年日本大会で3度目の優勝を果たし、今年8月世界大会に挑む。16年CD『35分戻りたい』でメジャー・デビュー。プレスリーの楽曲、オールディーズなどの演奏活動を行う。毎週火曜22:30、FM湘南ナバサにて「桐生大輔の気分は上昇キリュウ」放送中（インターネットにて聴取可）

キング・オブ・ロックンロール。そう呼ばれる男がいる。

エルヴィス・プレスリー。

黒人音楽のR&Bにジャズやカントリー・ミュージックを掛け合わせ、新しいロックンロールを誕生させた男。腰をくねらせて踊るパフォーマンスから、甘く優しいバラードの歌声まで。世界中の若者を熱狂させたミュージシャンが42年の生涯を終えて、今夏で40年になる。

「格好良くて、とてつもなく優しい人。ちよつと、弱過ぎるから」と

キング・オブ・ロックをそう語るのは、和製エルヴィス・桐生大輔。これまで出場したエルヴィス・プレスリー大会は、全て優勝。国内では、敵なしだ。8月にはいよいよ、3度目となる世界大会に挑むためアメリカに渡る。「リベンジしたい。どうしても」。優勝することを目標に、トレーニングを続けてきた。

野球少年がエルヴィスに出会ったのは15歳、没後20年の年。

「エルヴィスは男らしくて、格好いい。流行っているわけでもないロックンロールだったけれど、なぜかリズムにわくわくした。気持ちが包み隠さず表現されていて、どストリートに響く。高校の音楽の時間、ワイシャツの襟を立ててエルヴィスを歌っ

たんです。それまで3だった評価が、それをきつかけに5になりました。好きな音楽を友人と話し合えるようになったのは、大学生になってから。それまでは誰も共有できなかった」

学生時代はオールディーズのライブハウスに通い詰め、ウエイターのアルバイトをしながらステージに立った。歌うのは50〜60年代にヒットしたロックンロールやロカビリーなど。「若い人でもどこかで聞いたことのある歌。甘く切ない、青春のような」。その世界観に憧れ、エルヴィスを歌い続けてきた。リーゼントで決めた髪、キラキラとしたジャケツトやジャンプスーツなどの衣裳、アクシオン、そして歌。短い生涯を終えるまで進化し続けたエルヴィスのスタイルを、どこまでも真摯に写す。

「50年代から70年代まで、これが本当に同一人物だろうかと思うほどエルヴィスは歌い方が違う。どの時代のエルヴィスも好きですが、彼が目指したものが完成したのは死ぬ間際だったのではないか。77年のエルヴィス最後のコンサートを見ると、そう思うんです」

アメリカ・メンフィスには、エルヴィスが初めて、母に歌を捧げようとレコーディングした場所がある。そのサンスタジオで今夏、3曲のレコーディングが待っている。原点となるスタジオで、エルヴィスと桐生大輔が出会う。